

4167

征露劍舞



223
471

074687-000-5

特63-200

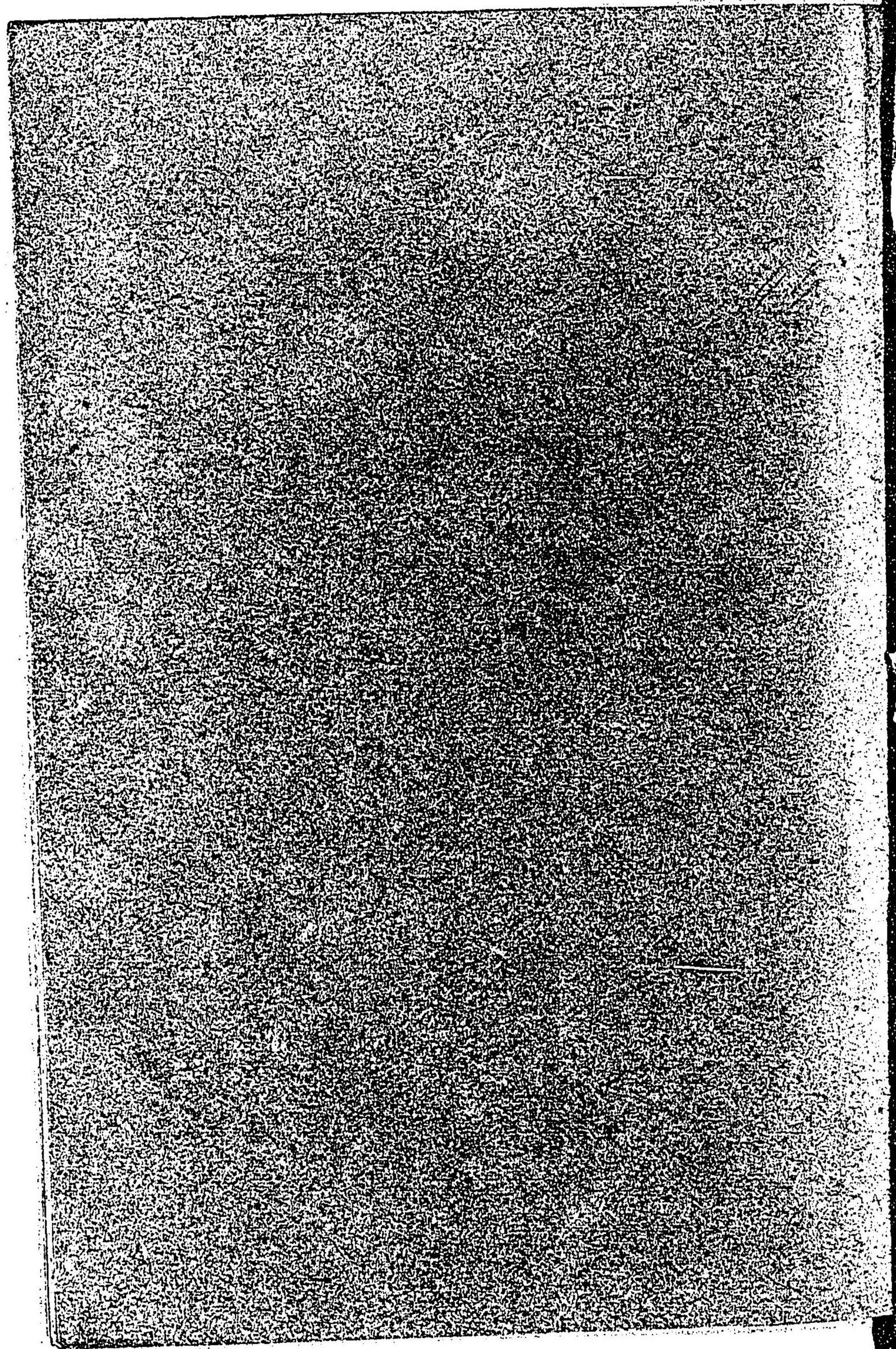
征露劍舞

熱血 散士/著

M37

CEJ-0206





征露劍舞

劍舞及詩吟

熱血散士著述

治 16

内交

詩は志なりと云つて其志を表白するものなり。今其志を他明に向
つて表白するには先音調の高低抑揚を以てす。詩も亦然り之を朗吟
て以て其志を發揚し加ふるに身振を以てすれば其志を發揚するは
層一層の眞情を發揮す。故に吟聲に伴ふて劍舞なるもの茲に初めて起
るなり。而して吟聲と劍舞との關係は恰も文樂座の人形芝居の如く太
夫の淨瑠璃文句を語ると人形の綾釣とが相承應して一段の眞情を發揮

するものなり。されば劍舞なるものは朗吟するものと舞ふものとが相
 承應し合致して初めて看客の感情を喚發することを得るなり。今朝吟
 者が詩の意を會得し詩中の人となりて至誠以て暴露の膺懲を語らば舞
 ふものも亦其朗吟中の詩の眞境に没入して劍舞すれば看るもの聴くも
 のも共に其詩境に没入して我を忘るゝに至る。斯境に至れば詩を吟す
 るものも劍を以て舞ふものも看客も相共に我を忘れて詩の眞境に没入
 して其詩句に従つて或は呐喊の聲を耳にし或は水雷發射の實景を見或
 は三軍の突貫攻撃を自ら爲しつゝあるが如く感じて座上の客たるを忘
 れ不知不識拳を握り眼を怒らし肩を聳やかすに至る。斯興を喚起すれ
 ば一死鴻毛より軽く奮然起て遠く膺懲の遠征に上らんと欲するの勇氣

を發し一死以て報國忠君の至誠を盡さんとするに至るものなり。
 故に劍舞なるものは彼遠征の途に上る勇士の別宴等にて之を行ふなら
 ば一は出征の勇氣を鼓舞し一は之を送る人も非常の感奮を以て彼を送
 り得るものなり。出征の別離堂に劍舞なくして可ならんや。
 良人は遠く遠征萬里の寒塞にあり孤閨の寒衾に觸れて轉た寂寥の時。
 征露詩集を繙いて朗々之を吟ずれば精魂遙に飛んで宛然硝煙彈雨の中
 に驅逐するの情懷油然として胸裏に浮ぶ。良人を戀ふるの情は恍惚と
 して千軍萬馬の大パノラマを幻出し來りて又孤閨に呻吟するの人たら
 ず。孤閨の我を忘れて宛然鬼將軍となり三軍を叱咤するの將帥となり
 て遠征の良人は我となり我は遠征の人と合致して愉快の情迸り出で

て征露軍中の人となるなり。孤園のライブラリー中又此詩集を欠くべからず焉。

四

況や青春血氣の學生諸士に於てをや。天朗かに風暖かなるの時此詩集を袖中に藏し輕裝草鞋を穿き孤杖を叩いて郊外を散歩し山河を跋渉せんとする時獨り巖上に踞して朗々征露詩集の一句を吟せば其感慨果して如何。肉踊り血湧き山彦反響して之に應ずるや恍惚千軍萬馬の中に没入して我を忘れ山を忘れ天地を忘れ悠悠々自適以て不知不識の裏に義勇奉公の精神を養成發揮するを得るに至るア、愉快ならずや。又身心不豫書齋に閉居せる時之を吟すれば心氣爽快自ら活潑の情油然而とし涌き遂に病中の人たらず。或は讀書に倦み職事に疲るゝ時は後

庭に徘徊し公園に散歩して靜に之を朗吟すれば勇氣頓に生じ快活以て其事に従事するを得るの功あり。讀書子又は勞働者に向ても詩吟の功能多大なり故に斯集を懷にして鬱散の具となす亦可ならず耶。

劍舞法

劍舞は吟聲に伴れて之を舞ふを法とす。時として坐興には自ら吟じ自から舞ふことあり。今は二者別人としての方法の大要を述べし。

(一) 吟聲 は詩を朗吟するを云ふ。吟詩の役を爲すもの注意を云はば袴を着けて巖然端坐すべし、先づ最初は豪氣堂々大英雄の心膽に住し虚心淡懷喜怒哀樂に偏らずして心神を靜平になすべし。今や大聲朗

吟を初むるに當ては詩の句意に従つて、怒るべき時は憤怒の情に住して吟すべく、喜ぶべき時は喜悅の情に住し、哀むべき時は悲哀の情に住じ、樂しき詩意の時は快樂の念に住して之を吟すべし。若し吟聲感情の其詩句の意に適せざれば大聲雜音の喧騒に終らん。故に喜樂の情を表する時は廣く緩き音聲にて吟すべく。悲哀は細き音にて吟すべく、莊嚴の情を發揮せんには緩ならず急ならず大音ならず小音ならず其中間に在りて吟すべく、憤怒の時は促音にて少しづゝ音を切りて吟すべし。之を要するに音聲の高低緩急抑揚等と吟聲者の感情とが其詩句の情想に一致して始めて其吟聲の任を完ふすることを得るものなり

(二) 劍舞 是劍を以て舞ふなり。舞ふ人は著袴 秋水を佩し日の丸

の扇を持ち鉢巻をなして場中央に端坐し一禮して以て吟聲の發聲を待つべし。其感想は吟聲者と同様なる情念に住せざるべからず、吟聲初まるや直に立ち詩句の情趣に従つて舞ふべし。其態度は喜怒哀樂其度に従ひ秩序井然緩急宜しきに法り擒縱自在寬猛其情を發揮して觀者をして不知不識其詩意に没入せしむるが如く舞ふべく、舞ふ人も其境に在るの念想に住せざるべからず。茲に至りて初めて吟する詩の眞境を眼前に影現せしむるの妙處に到達し得て、吟する人も舞ふものも見聞する人々も皆詩の眞境に没入して、只吟する聲と舞ふ音との中に無限の感慨洋々たる一場の千軍萬馬硝煙彈雨の大パノラマを現出するなり。

(三)二者の注意 吟聲者も劍舞者と共に其詩の眞意を熟知せざるべからず。若し然らざれば舞吟ともに其表情を全ふする能はず、故に詩の題意を知りて其情操に住して之を吟じ之を舞ふべし。送出征の詩は其時の感想に住し、聞捷報の時は戦勝の號外を讀んで萬歳と絶叫した時の情想に住して初めて吟すべく舞ふべし。然る後詩の句毎の情意に法りて吟すべく舞ふべし、故に詩題の意義及び詩句の情想の中に没入し我自ら詩中の人となりて之を吟じ之を舞はざるべからず。依て次下に二三首の舞劍の舞方を圖示すべし、此に依て練習すれば自ら劍舞の妙技に入ることを得ん。

○一死輕

昆山逸士

丈夫何必爲功名 報國丹心一死輕
匣裏雙龍鳴不止 先從渤海戮長鯨

(詩意) 忠君愛國の眞心から見れば死ぬる位のことば容易なことで一死鴻毛より輕るいと云ふ意なり。

丈夫何必爲功名 此句は男子たるものは何にも是非とも功名手柄を仕たいとは思はぬワイ。

報國丹心一死輕 此句は手柄を仕たいとは思はぬと云ふ上の句を受けて来て、然し君に忠に國恩に報ずる眞心(丹心)から見れば死ぬる位は安いことだと燃ゆるが如き愛國心を云つた所なり。

匣裏双龍鳴不止

此句は上の二句の意を轉じて來た句である。即

別に手柄を仕ようとは思はぬが報國の爲には死も惜まぬ、とは云ひながらオメオメ死ぬればせぬワイ、大事に仕舞つてある箱の中の刀さへ手柄が仕たいと云つて鳴いて居るではないかと一層の勇氣を發する所を述べた句である。

先從三渤海一戮三長鯨

此句は結句として上の三句の意を結び納むる句

なり。即別に功名を仕よふとは思はぬが國の爲には死ぬる位は安い其上腰刀も切味を試めたいと云つて鳴いて居る。幸露國が暴逆で旅順あたりで横行して居るから第一番に渤海灣からして征露の血祭に大きな鯨(軍艦)でも切りまくつてやらうワイと云ふ意なり。

○「丈夫」と吟じ初むるや突然立ちて握拳を片腹の帯の上位にあて肩を聳かしドーン／＼二三歩前方に進む其間常に大丈夫の心を持ちて意氣揚々たるの態度をなすべし

何必爲三功名

の句に移るや足を投げ出して坐し斜に天を睥睨する眞似をなし泰然手を拱むべし報國丹心の句に吟じ移るや驟然立つて拳



を以て二三度胸
部をゴーツク
と打つべし。

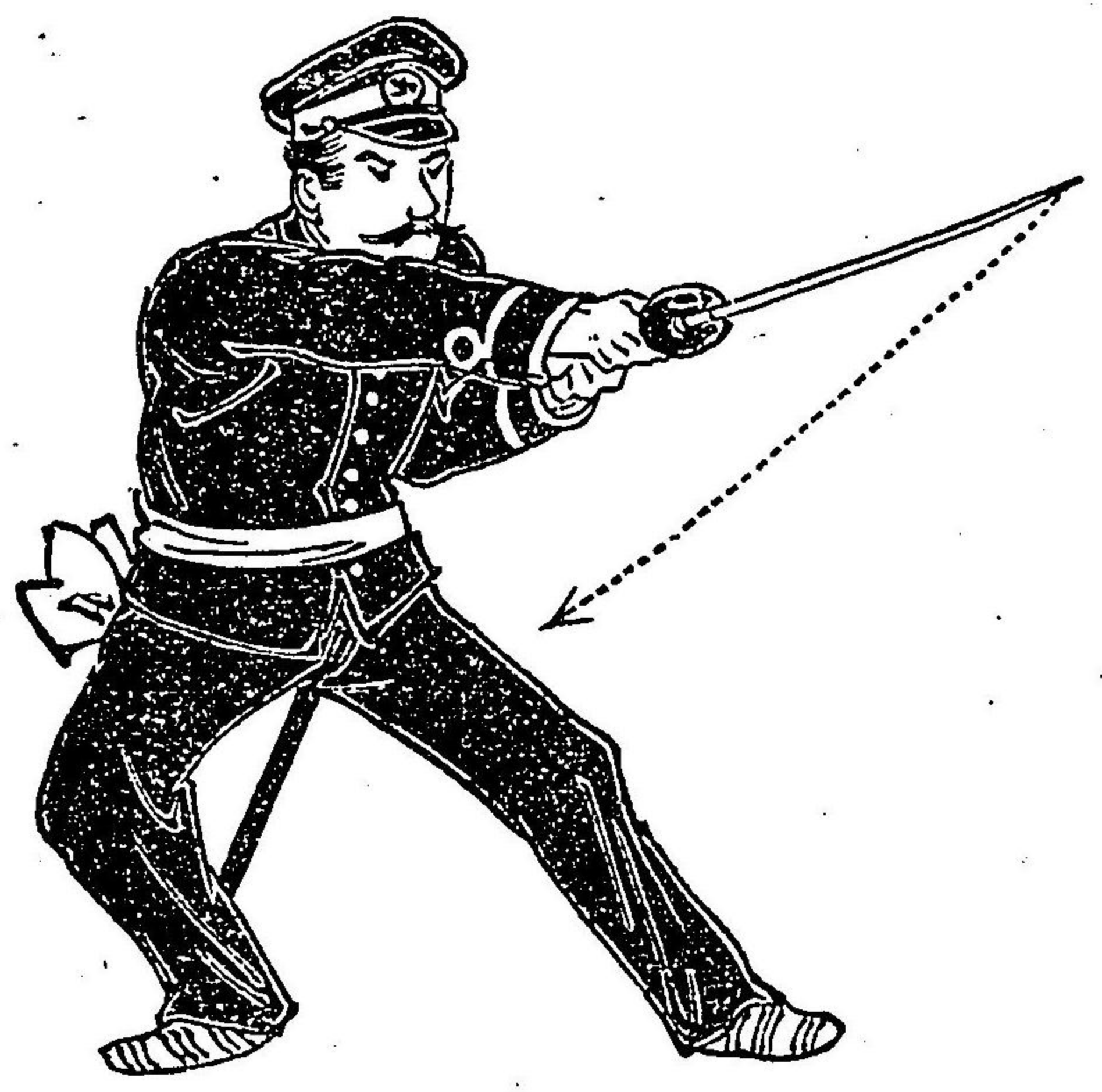
一死輕の句の時
は二三度躡立を
なして身の輕さ
風をなすべし。

匣裏双龍鳴不
止の句に吟じ移
るや一倍の勇氣を鼓舞して左手にて刀を少し引出し右手



にて二三度鰹口を緩るめ
カツくと鏗音をなすべ
し。

先從ニ渤海の句に吟じ移
るや大股に二三歩前に進
み又退いて刀を抜き放ち
前後左右を切り廻はして
吟じ了るや靜かに刀を鞘
に納めて後場の中央に歸
り一禮して退場すべし



○大詔下

吉田 勿來

十四

大詔下 羽檄飛

貔虎百萬擁龍旂

臥薪十年飲熱血

一劍今日怨可雪

軍門令嚴威如山

健兒踴躍齊破顏

王師所嚮虜膽破

肅慎韎鞞指顧間

(詩意) 明治三十七年二月十日之夜、日露の外交談判破裂して遂に今上陛下宣戦の大詔を下し玉ふ。斯に吉田氏感佩一詩を賦したるものなり。

大詔下の句は前述のことなり。

羽檄飛の句は召集令動員令等の軍令發布を云ふ。

貔虎百萬擁龍旂の句は赴々たる百萬の大軍が旭の御旗を擁護して征露の途に上るを云ふなり。

臥薪十年飲熱血の句は征清の役遼東遼南以來我國民は臥薪嘗膽として十年間辛苦經營した其苦みは單に熱血を飲む位ではない非常なる苦辛をなせることを顯したる句なり。

一劍今日怨可雪の句は十年間臥薪の怨をば彼露國に向て一劍を見舞て以て雪ぐべしとの意なり。

軍門令嚴威如山の句は軍令兵軌は嚴重なり殊に 大元帥陛下の御

十五

稜威は泰山の如し然して國威隆々として旭の上るが如き我國の威勢を述べたり。

健兒踴躍齊破顔の句は宣戰の大詔を拜して常に肥肉の歡に堪へざりし健兒が勇み立ちて喜びニツヨリ(破顔)して今日こそはと奮勵しつゝある様を云へるなり。

王師所嚮虜膽破の句は君臣共に勇める正義の師なれば何處に至るも賊虜は敗北するの意なり。

肅慎鞞鞫指顧間 肅慎鞞鞫は今日の滿洲の東北部にして吉林黑龍江の兩省あたりなり。此等の地方は眼の先にあるが瞬く間に征伐し得るの意を偶せるなり。

(注意) 第一の二句は征露の大詔下り百萬の大軍が出征することを述べ、第二の二句は征露の原因を説き以て其怨を報ずべき時なることを述べ、第三の二句は國威隆々臣民皆精忠の士にして百萬の健兒あり國民一致以て露國の伐つべきを認知せるが故に健兒皆出征を喜べるの意を現はせるなり。

第四の二句は征伐の名正しく義勇の師なれば其向ふ所敵なく肅慎鞞鞫も指顧の中にあれば何等の勞なく其功學がり凱旋の時遠からざるの意を表せる句なり。

○「大詔下」の句を吟じ初むるや威儀嚴然として立ち三步前に進みて直に跪き、頭を少し前に俯し兩手を伸べて詔勅を拜受し頂きて退くべし

「羽撃飛」の句に至れば急劇
に前後左右に軍令を配附す
るの状をなすべし。

「貔虎百萬擁三龍旗」の句の
時は意氣揚々佩刀を其まゝ
抜いて旗の如くに指し上て
二三歩前に進み以て軍旗を
捧げて進軍するの状をなす
べし。

「臥薪十年」の句に至れば刀

を投じてグンニヤリ
して手を拱みて悲し



む状をなしニロリと横臥すべし。

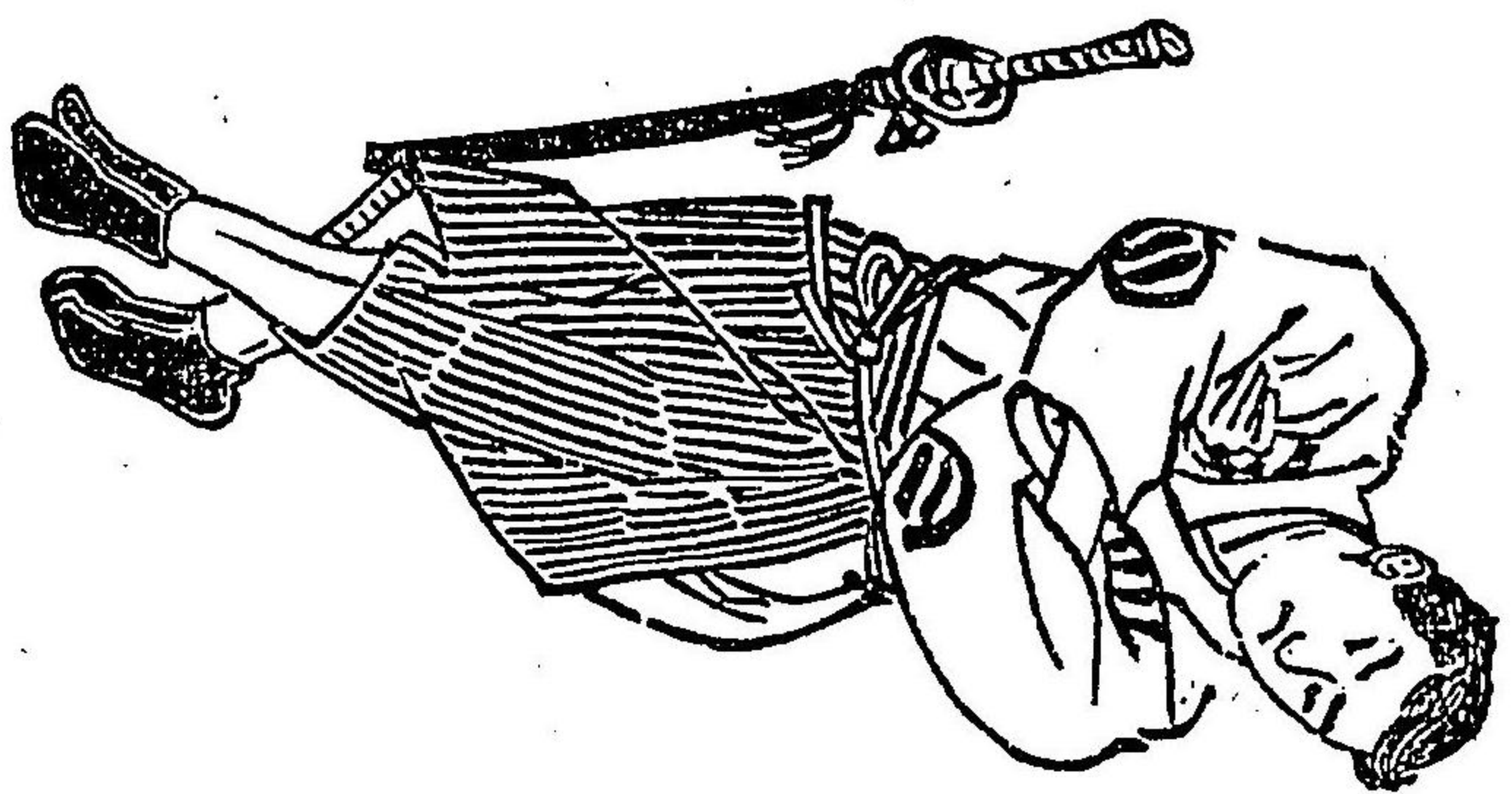


「飲ニ熱血」の句を吟じ出すや奮然として起き安坐して切齒扼腕の状をなすべし。

「一劍」と吟じ出るや直に奮然として起ち刀を撫で。

「今日怨可雪」の句で以て刀を抜いて敵を切り拂ふの状をなすべし。

「軍門令嚴」の句に至れば姿勢を直立にし両手を垂れて最敬禮の様子をなすべし。



「威如山」の句を吟する時に至れば莊嚴神聖なるものを拜するが如く頭を少し上げ、畏るしと神を拜する如く一瞥して又頭を下るの状をなすべし。



「健兒踴躍齊破顔」

の句を吟するに
 至らば堂々たる
 男兒悠々進み出
 で、悦れしき様
 子をなし刀の柄
 を握りて遙かに
 天を眺めてニコ
 ニコと笑顔をな
 すべし。

「王師所」の

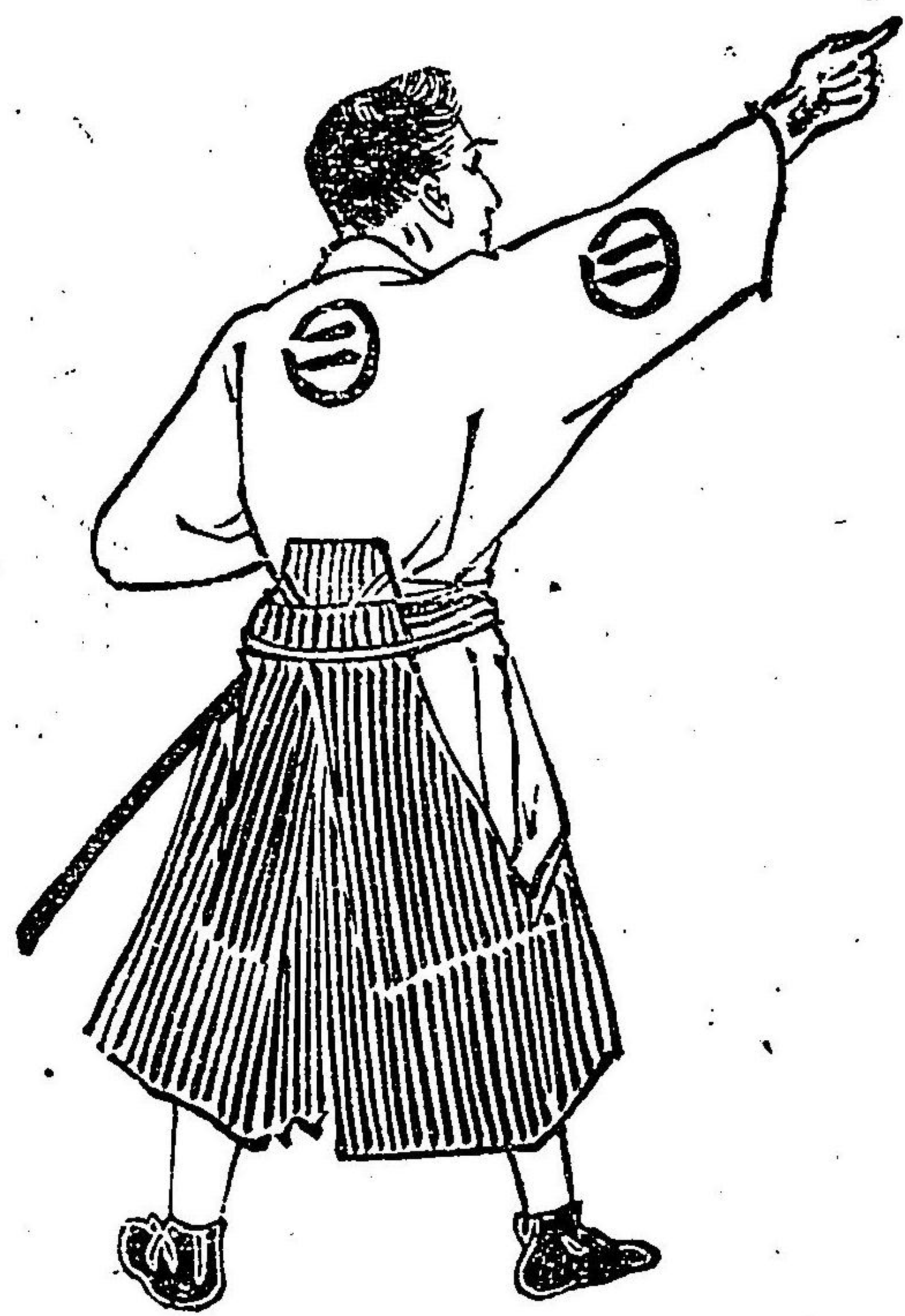


句に至れば抜刀を突出して前方斜に左右に進み其威を示すの状をなす
 べし。

「磨膽破」の句に吟し移るや刀を捨て、両手にて、両袖口
 を持ち我身の袖
 の右を見左を見
 て敗北の悲むべ
 き情を示すべし
 「肅慎鞅鞅指顧
 間」の句を吟し
 初むるや左手に



て刀の柄を握り悠
然として少し右向
きに遙に天の一方
を眺めて以て指し
示すの状をなすべ
し。



○塞下曲
劍氣稜々閃八荒

平野象軒
鏖歌落月滿郊霜

十年飲馬龍城窟

朔北江南道路長

(詩意) 塞下の曲として陣中の有様及所感を述べたるなり。劍氣稜々とは我日本魂たる寶刀は其威稜英雄を世界萬國に輝き渡りて居る、其刀を抱いて陣中に居る當時の有様は遠くラツパの聲が響き、月は遙に西山に落ち、霜が地面一杯に降りて白く何となく心淋しいことだワイ。併し征清役後今日露國を征伐するに至るまでは千辛萬苦軍氣を勵まし馬に飲みて時機の至るのを待て居たのだワイ。今日此陣中に出て來たがマダ、滿洲の野を征伏するには長い道を行かねばならぬから益勇氣を鼓舞して置かねばならぬワイと奮勵一番する所を表したる詩なり。

「劍氣稜々」と吟じ初むるや袴の股立を取り袖を捲り刀を抜き放ち左右へ二三振りユウ〜と振つ見て鏝元から切先までズート見上げ見下すべし。

「閑ニ八荒」の句に至るや二三歩前に進み出で一刀前に斬出し又振かざして左右前後を斬廻して日本刀の切味を示すべし。



すの状をなすべし。

「鏡歌落月滿郊霜」の句を吟じ初むるや、刀を收め二三歩退き耳を傾けて鏡歌を聞く様子をなし。又仰で月の西山に入て見へざる様子を爲し。次に霜を踏む如く軽き足並にて爪立に歩み寒き様に身体を覺むべし。

「十年」の句に至れば前



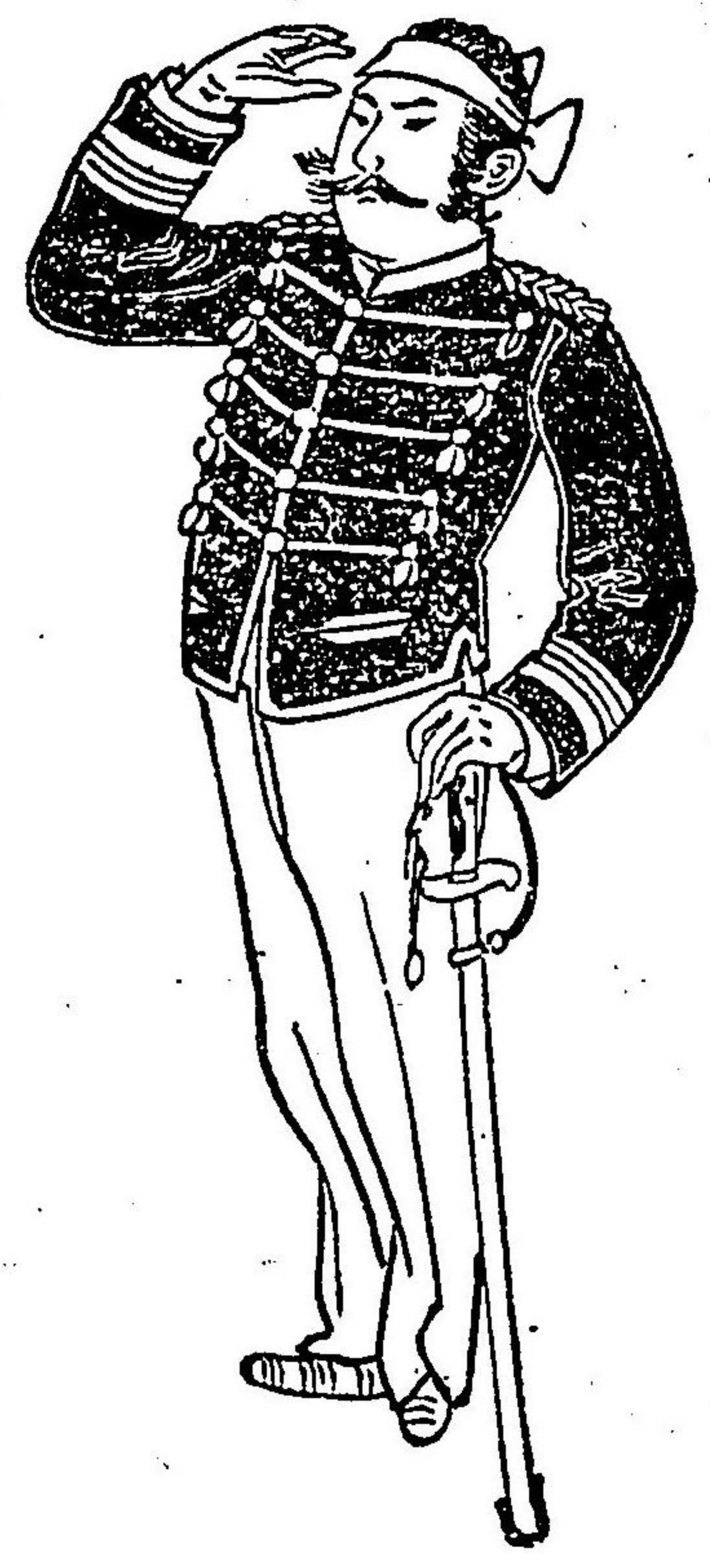
に反して一層憤厲して
拳を握り苦辛する様を
見せ。

「飲馬龍城窟」の句に
至るや馬を牽く如く手
綱を取る風をして二三
歩前に進み手を拱み安
坐して熟慮苦辛せる様
をなすべし。

「朔北江南道路長」の句



に至るや奮然と
して立ち刀を杖
につき手を額に
あて、遠方を望
見してヤツト見
入るの状をなすべし。



○征露途上

参謀 某中佐

誰渡大江撃楫歌
寶刀三尺雄圖足

滿天風雪斫龍鱗
樽俎十年遺恨多

雲霽雞林古城關
邊功固勵男子事

春寒禹域舊山河
不見漢家老伏波

(詩意) 露國征伐の途上にありて其實景感慨を述べたる詩なり。

誰渡三大江一擊楫歌の句は誰か鴨綠江をたりにを渡つて居ると見へるワイ、楫を撃て歌て居るのが聞ふるからと詠じたるなり。

滿天風雪斫三龍鼉の句は風寒く雪は降りしきりて強勇の大丈夫をも苦しめるワイと歎じたるなり。

寶刀三尺雄圖足の句は風雪位は何のこの此三尺の寶刀さへあれば充分の成功手柄が出来来るワイと勇氣を奮ひ起したるなり。

樽俎十年遺恨多の句は征清の時遼東を遼附して已來種々の外交談判に失敗して十年の遺恨がある何ぞ悠々して居られるぞ勇戦一番此遺恨を晴らさねばならぬと云ふ意なり。

雲齊鷄林古城關の句は我帝國の親善の交誼よりして朝鮮八道は領土安全となれる所を賦したるなり。

春寒禹域舊山河の句は滿洲(禹域即清領)の山河は未だ露國の束縛を脱せざる所以を春寒に比して何れ旭の春光に暖めらるゝ時は近いぞと云ふ意を含みて詠じたるなり。

邊功固勵男兒事の句は滿洲の邊境に來りて彼暴露を追ひ拂ふことをなすは男子と生れた役目は何にも心配するには及ばぬとの意なり。

不見漢家老伏波の句は彼漢時代の伏波將軍も若い時は漢の北境を守りて功を立てた人である、其人も老しては役には立たぬが吾人男子等には老耄れた將軍は一人もない皆勇氣堂々たる大丈夫計りたどの意を詠じたるなり。

「誰渡ニ大江」の

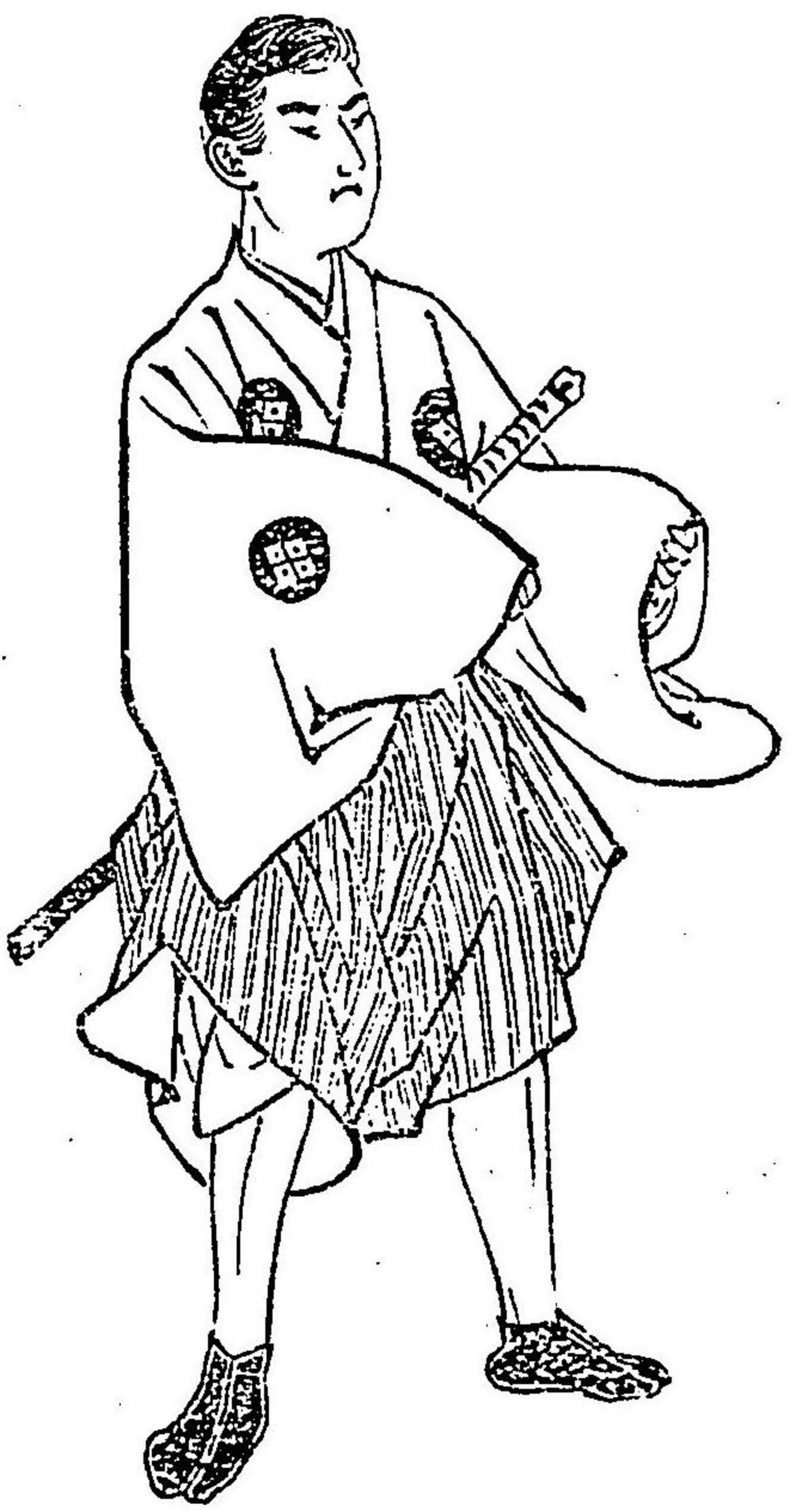
句を吟じ始るや
渾身に力をこめ
袴の股立を取り
立つて遙に前方
を眺め下すべし



「擊楫歌」に至るや頭を少し傾け楫で舷を打つ聲を聞くの状をなすべし。

「滿天風雪研三龍

鼈」の句に移る
や袴の股立を下
し両手にて両方
の袖口を持ちて
雪の降り掛れる
を拂ひ落す真似
をなし、頭を擧
げて大雪の降りつゝあるのを見る真似をなし。次に勇氣勃々たる大丈



夫も風雪の爲には困難するといふ有様を示してグムニヤリする状を示すべし。



「寶刀三尺」の句に移るや奮然として全身に力を入れウソと音を發しスラリと刀を抜き一振り振り鏢元より切先まで撫づる風をなし両手で柄と切先を以て押し頂き是

れさへ有れば大丈夫の意を示すべし。

「雄圖足」の句に

至れば刀を鞘に收め悠々腹を少しつぎ出し静に胸を撫で廻して安心の意を示すべし。

「樽俎」の句に移

るや手を拱みて心配の様子をなす。



「十年遺恨多」の句となるや忽ち安坐をかき長大息をつき意の如くならざるを残念がるの状をなすべし。

「雲霧雞林古城關」の句に吟じ移るや立ちて体を少し前に俯け手を額にかざして遙か下の方に城を眺むる状をなし。

「春寒禹域舊山河」の句に至れば両方の袖口を手で持ち裏寒い様子となり右の方を眺め左の方を見て未だ油断が出来ないと云ふ状を示し

「邊功固勵男兒事」の句に至るや奮然として四方を見廻しつゝ歩み突然刀を抜いて前後左右を斬廻すべし。

「不見漢家老伏波」の句に至れば拳を握り胸を叩いて大丈夫の赤心を示し次に刀を提げ肩を怒らしドシ／＼と足音を爲して大股に二三歩前

に進みて以て大和男兒たる勇氣を示す状をなす。夫れより吟聲の終ると共に坐し一禮して退場すべし。



樂府之部

○大詔下

吉田勿來

大詔下。羽檄飛

貔虎百萬擁龍旂

臥薪十年飲熱血

一劍今日怨可雪

軍門令嚴威如山

健兒踴躍齊破顏

王師所嚮虜膽破

肅慎鞅鞅指顧間

○奉公義

奉公義。報國誠

慷慨倚劍別父兄

弟妹猶存報國志

臨岐只說擒胡事

男兒心膽與鐵堅

沙場百戰誓凱旋

出門一笑星斗動

舉首北望鮮卑天

○旭旗翻

旭旗翻。峨艦兀

煤烟抹空凌冥渤

紫電礮彈雷霆旬

月尾島外屠長鯨

忽聽舵樓鐃歌起

征虜戰捷從此始

○魚雷飛

黃金山上陣雲屯

黃金山下驚濤翻

夜色暗澹天無月
海矗立魚雷飛

○勝敗決

魚龍仆。龍鼇奔
行艦若操馬
橋頭旭旆影爛斑
君不見敗餘虜艦去無影

○虜艦來

虜艦來。率土濱

突如來者看沈滅
曉看虜艦僵沙磯

萬雷劈破莽乾坤
凌濤似馳野
勝敗之機決此間
萬里一碧滄溟間

漫向賈舶轟礮頻

一舶纔逃一舶覆

君不見海參灣頭水生骨

○章唯六

驕胡揮螳臂
日東天子援高麗
訂盟簡易唯六章
從茲應救國步難

○決死隊

馬革裹屍男子心

彼何兇暴神人怒
他日氷泮飛暗塵

跳梁恣侵地
訂盟且擬鞏國基
輔車相依厚輯睦
箕邦八道鼎彝安

笑踏滄海非陸沈

巨舶載石任委棄
拔山翻海事非難
決死却不死
竹帛可傳決死隊

○海參崴

渤海灣頭已破敵
海參崴。霹靂飛
艦如山蹴浪旋

○舷舷摩

乖龍亦合驚奇智
囊沙壅水真兒戲
相見却訝生非生
赫々七十七士名

試向北溟一搏擊
冰山碎無敵旂
威武早壓窮髮天

輕舸剪波疾於電
砲々觸。舷々摩
縱橫馳突何健捷

○遣韓使

遣韓使。藤樞相
鞞鼓。鏖々響戎樓
韓境生民無寧處
我皇善隣命元老
東瀛三月發梅花

舷頭開煩乍鏖戰
彈雨注叢蜂窩
忽爾虜艦破如葉

奉睿旨。駕鯨浪
連山烽火不暫休
韓廷臣僚有深憂
揆張樂俎修國寶
春風吹入韓山霞

○斬艦長

轟雷一發洞濂艦
咄此奴一聲
昔聞筑海焚虜船
渾身是膽鬼神驚

○不知危

氷山峨々澗海涓
可憐窘極智亦瞑
火輪脫軌氷下覆

舷頭飛躍疾似風
揮刀氣萬丈
今看渤海斬艦長
錄功簡冊惜逸名

氷上鐵軌空希奇
自臨深淵不知危
生靈八百嗽々哭

貪狼恫悞漫誇雄

豈知覆轍國運同

君不見烏拉山頭日西昃

黑龍江氷黑逾黑

○赤誠見

少女醫金鈿
傾囊爭向王師獻
不恤偉兮恤不忠

老婦典裘氈
一燈雖微赤誠見
日東不怪國光隆

五言律及古詩

○恭奉拜出師詔

古澤介堂

驕胡敢送死

恫惕恣侵攘

征伐由天子

鷹懲令萬邦

神人怒共向

海陸銳無當

義戰誠冠絕

堂々我武揚

○同

吉田勿來

於鏢我皇帝

溶明日月彰

文命布四海

武威輝萬方

鴻基三千載

懿德寔隆盛

天驕破輯陸

蛇豕噬友邦

皇帝赫斯怒

宣詔煥發光

六師勢虎奮

三軍氣龍驤

貔貅亘朔漠

艨艟壓海鄉

匡輔盡俊哲

億兆咸忠良

已有皇天佑

武成告百王

○元尙武

逸名

嗚呼大日本

國俗元尙武

猶立東海表

古來不受侮

暴戾彼何者

蠢爾憎醜虜

王帥一臨之

不異囊中鼠

我願擒虞酋

歸獻皇明主

○向無敵

全

嗚呼大日本

鴻荒受天命

東方計平和

樽俎一出正ソウソウヒトトクニイテハタシ 暴戾彼何者ボウレイカレナニモソウ 豺狼逞野性ヤイロウヤセイヲタクマシラス
 我皇赫斯怒ワカウヲウツクシクトシテコノニイカリ 興師告列聖シテオコシテレツセイニツク 仁者向無敵ニシヤムカフニナキナシ
 百戰百制勝ヒヤクセンシテヒヤクナガラカナチセイ

○奉天意

全

嗚呼大日本ウフオホニホン 古稱神祇域イニシハハシシギノキキトシヤウス 逢此紀元節ヨキキジゲンセツニアラ
 捧讀宣戰勅ホウダクセンセンチヨク 忠義激肺腑チウギキハイクンチヤキシ 忼慨淚沾臆カウガイナシタムチワルホス
 萬人同其心マンジンノコノロチオナシラン 四海戮其力シカイソノチカラチアハス 願此奉天意チカハクハコノニシニイテホウツテ
 驅除世界賊セカイノソクテクノチヨセ

○時事有感

大江敬香

戎軒志叵酬ジウケンシゴロサキムクヒガタシ 猶抱濟時憂ナホイダクセイジウレヒ 急雪埋邊塞キユセツサイチワラセ
 迴風捲戍樓クワイフウクワンロウチヤク 夙稱東海霸ソトニシヨウストウカイノハ 須講百年謀スベカラクカワスベシヒヤクチシノハカリゴト
 慷慨思投筆カウカイオモフテフチオツスレバ 黃雲蔽滿州クワウウンシマンシロチオフ

○從軍行

川村春城

殺氣滿天地サンキマンチニミチ 雞林警燧驚ケイリンケイスイオロシク 國威振秘略コクキヒリヤウチフルヒ
 我武壯神兵ワガアセンバイサカンナリ 肥馬雪中立ヒマニセウチウニタチ 懸軍冰上行ケンケンヒヤウシヤウチユク
 羽書傳搏戰ウノショハンセンチツタヘ 萬歲悉丹誠マンサイシイトトクセ

○送征行

全

帶甲扶桑士タイカフソウシ 爲君從遠征キミノタメニエンセイチホグル 戎衣辭故國ジウイコクチシ

鞍馬向邊域 艸木風塵起 大河冰雪明

別離成昨日 堪見古人情

○只一死

某

慷慨從戎軍 幾萬貔貅士 孰無父與母

亦有妻與子 私情非不及 忠義徹骨髓

一身已許國 戰功亦自企 縱橫沙漠中

起臥冰雪裏 生還非所期 所期只一死

○又陷落

長劍生

陷落又陷落 火輪成催殘 將卒化魚鼈

一去不復還 嗚呼是何物 露人肝膽寒

况聞羽書急 血漲渤海灣 朦朧半破碎

滿廷驚且歎 乃知古人戒 積威如冰山

漸滅不可恃 難保一日安

七言絕

○旅順捷報

土屋弘

義戰當年存軌範 王師所向誰能犯

朝來先喜捷音傳 旅順港口摧虜艦

○全

聖皇不是好紛爭
想見元戎渡遼日

爲護隣邦且進兵

自西自北簞壺迎

○逸題

牧野南山

關外將軍伏劍時

急風捲雪滿天涯

書生亦管戎軒事

好講陳篇教健兒

○時事有作

釋清潭

正是神州唱義時

貔貅十萬入邊陲

喜聞塞上頻傳捷

草露紛々肅旭旗

○從軍行

平野象軒

峨艦堂々破怒濤

航程幾日氣增豪

夜深風伯去無迹

明月一痕檣上高

○塞下曲

全

劍氣稜々閃八荒

鏡歌落月滿郊霜

十年飲馬龍城窟

朔北江南道路長

○全

全

曠原落日繞寒烟

此去鷄林路八千

霸氣當年望未斷

驂騑嘶過鴨江邊

○甲辰二月紀事

忘機閣主人

彤闈昨日拜恩初
月轉西廊一人未散

仰見天顏喜氣舒
更闌檢到受降書

○全

全

畫戟瑯戈霜色明
街頭半夜笳聲急

軍符朝下羽林營
知有貔貅入遠征

○征露宣戰歌

野口寧齋

從軍無富又無貧
召集有令齊蹶起

誓爲君家致此身
無非義勇奉公人

○全

全

夜々風高戸戸砧
五千餘萬男與女

軍資不惜獻黃金
上下此時惟一心

○聞旅順捷報

町田柳塘

強隣跋扈奈渠如
一夜雷霆掀濁浪

正是干戈相見初
長鯨忽化釜中魚

○仁義師

評林子

欺世欺人又自欺
縱橫自恃頑凶性

豺心狼骨萬邦知
焉敵堂堂仁義師

○鳥港偵察

太古山人

進航港口勢飛騰
海舸陸墩均畏縮

威赫礮聲山欲崩
惟看虜膽冷於水

○旅順第四攻擊

全

渤海灣頭劇戰時
砲墩破壞巷衝焚

肉飛骨碎血淋漓
天塹山川難復支

○水雷捕獲

全

雷艇相摩舷與舷
就中一卒揮雄劍

吾兵健鬪躍身先
殘敵悲鳴蹴海捐

○戰後光景

全

譙樓胡角響空洋
吞恨幽魂迷處所

月黑港灣新戰場
見燐明滅夜蒼涼

七言律及古詩

○詠梅喜皇第一捷

江木衷

傳來芳信解人憂
勁質古梅腸鐵石
江山失險雪千里

乍破荒寒日氣迢
鱗皴蒼蘚影蛟蚪
天地無塵春一樓

二十四番從是始

○聞皇軍第一捷

黯澹陰雲壓極東

耳猶未掩奔雷迅

聞說奇勳先制海

丹墀奏捷諸公在

○喜皇軍第一捷

艨艟蔽海怒濤堆

魘魅替踪陣雲散

祖風尙武日東國
勳績古今何以比

○全

艨艟蹴破北溟波

群醜元知如拉朽

歡聲盈路夜燈鬧

開關以來無此事

○全

膺懲鴻詔下丹墀

五十八

兵家月冷亦風流

永井禾原

天風一夜送艨艟

山已如崩怒浪雄

料知威略忽平戎

愧我無詩頌大功

塚原夢舟

忽見常山蛇勢開

雷霆得勢虜氛摧

義戰制機天下魁
萬邦齊唱凱歌來

高島九峰

蹙額穹廬竟如何

大軍唯見似懸河

瑞氣擁城春雪多

皇威今已及歐羅

松田學圃

絕海棠堂々出六師

五十九

堪喜將軍衝敵早
連牆積勢浮峨艦
羽檄昨夜來傳快捷

○全

西來羽檄萬夫歡
隣土安危須義戰
旌旄所向天無敵
第一東風先獻頌

○全

可憐胡虜察機遲
一戰餘威肅大旗
嵩呼正頌組元時

本田種竹

蝶海風雲此壯觀
王師仁勇救時難
胡虜漫稱蠻端啓
九霄飛詔下金鸞

全

落日金山鼓角寒
甲犀有勢射潮水
誰惜荊州先扼蜀
武威萬國齊瞻仰

○全

朔漠何容一顎搏
破山火礮沈鐵艦
絕塞跳梁征突厥
捷書日奏豐明殿

峩峩大艦半摧殘
凍雀不飛隣紇干
我防秦國爲援韓
星斗森然太乙壇

全

六軍貔貅盡桓桓
劈海金蛇雷炸丸
外庭稽顙見呼韓
定有君王帶笑看

○全

於赫興師我武揚
萬邦風靡乾坤肅
戰艦蹴空堅似鐵
天時人事有歸處

○全

王師一出勢堂々
朔雪沙河天宇晶
千尋渤海無魚鼈

手島海雪

仁川港口碧泱泱
八道春融日月光
節刀斫地凜凝霜
不犯秋毫率典常

全

樓艦如山壓北洋
東風海日羽旄颺
萬里秦關尙虎狼

春入梅花應奏曲

○聞戰報

蠻風吹入滿韓天
兇露專橫和遂破
陰氛殄滅仁川雨
請看章旗紅日影

○喜皇軍第一捷

絕海波濤漲綠氛
萬兵直自日邊出

興安嶺上麗霞光

龍淵獻山

樽俎折衝大義全
吾皇赫怒戰茲宣
妖氣銷沈澎海煙
色鮮烏拉最高巔

岩溪裳川

樓船諸將氣如雲
一戰已爲天下聞

大義宣威金馬詔
平生筆硯耽閑事

○全

何時魚腹葬全軍
蛇豕幾年逞欲望
陰雲絕塞馬空立
虜張籌謀羸得在

○全

黃金山黑朔風號

奇功錫命水犀軍
雅頌何人繼柳文

全

眼見東風赤壁焚
君臣一代誤功勳
落日殘檣鳥爲群
鬼燐如雨哭聲聞

永阪石埭

短舸直衝峨艦牢

期得萬生臨虎口
旬爾爆發水中火
驚破港樓歌舞夢

○聞仁川旅順之捷

干戈相訴豈吾情
虛偽詐謀稱讓步
豺狼巢窟山川莽
擊破艨艟先破膽

○甲辰雜咏

肯將一死比鴻毛
渤海騰成天半濤
群酋被酒倒軍袍

福原周峰

時局協和終不成
妄言恫喝動淪盟
仁義王師旗幟明
蕃酋焉得敵天兵

宮内銚灣

羽檄傳烽邊警多
十年嘗膽頻磨劍
宣戰天關頌鳳詔
掃清停見乾坤廓

○全

機槍耽々朔天陰
北海鯤移兵氣動
狡馬擬逞啓疆志
一擊直須寒賊膽

白山黑水路如何
四海齊心思枕戈
摧鉢鐵艦壓鯨波
且唱平戎第一捷

半夜雞聲蹶衾起
白山龍徒陣雲洗
蠢爾長懷猾夏心
橫磨十萬劍光森

○全

萬里煙塵蔽盛京
折衝幾日煩尊俎
獐狃終勞周室伐
欲除兇虐靖瀛波

○弗戢

弗戢笑渠將自焚
吾皇節怒師名正
曲老安能當直壯

福井學團

鷄林也見祲氣橫
詭譎無心重誓盟
邛支詎免漢家征
聖旨何曾好弄兵
歷山遺志在併吞
大詔初頒廟勝尊
魚麗空見接雲屯

戰塵吹滿曼殊路

○甲辰二月

兵符昨夜下茅茨

自有歸隣助薪水

風雲頻動壯士氣

百戰功成冰雲裏

○全

一擊雷霆碎虜船

悵魂空哭淵中月

春色蕭々村又村

宮内詔灣

忼慨從戎臨岐路

不教家室苦寒饑

涕淚肯含兒女悲

歸來待見佩金鷄

全

硝煙彈雨漲仁川

飛雷遙傳海上天

行看雄風清鞞鞞

雪帆從是應無恙

○旅順捷報

疾雷破浪響礮根

燕雀安知燔棒牢

楚濱空問膠舟恨

奇捷萬邦傳偉績

○奉拜出師詔

驕胡逞勢益南侵

肯容惡浪汨朝鮮

九萬誰妨鵬翼騫

全

催劇將軍歡未央

水犀何料失餘糧

遼河已無天塹防

功名豈獨說周郎

町田柳塘

四百餘州白日沈

浪黑鯨鯢翻渤海
一朝忽破善隣誼
恰值膺懲願詔勅

○征露途上

誰渡大江擊楫歌
寶刀三尺雄圖足
雲霧鷄林古城關
邊功固厲男兒事

○送出征

出戰壯人膽氣豪
黑龍夜暝風雨急
逸興罇前飛醉墨
乾坤俯仰無窮淚
○甲辰二月組事
夜營吹角鳳城端
遼海掣鯨擒索虜
勢成但覺建瓴易
凝集乾坤忠義氣

風腥鷓鴣掠鷄林
萬性誰無愛國心
誓期朔北掃妖祲

參謀某中佐

滿天風雪斫鼉龍
樽俎十年遺恨多
春寒禹域舊山河
不見漢家老伏波

逸名

樓船直駕北溟波
鐵嶺秋深星斗高
悲歌燈下拭霜刀
如雨滂沱灑素袍

森槐南

耿耿星芒拓戟看
天山傳箭走烏桓
戰捷逾知銷甲難
梅花鐵骨鑄春寒

○逸題

東行逸士

日東男兒威堂々

不容驕胡犯國光

旅順港外礮雷發

翻海動山我武揚

可憐孤壘落日急

高濤隔斷釜魚泣

國家畫策在全局

勿將一勝期功成

君不見義勇奉公節

四千餘萬是干城

○送原田夢龜

磯野秋渚

大瀛西去陣雲高

年少從戎志氣豪

鳴綠波奔春飲馬

曼朱雪亂曉磨刀

鳴笳吹角時驚夢

糞飯寒菹且解勞

此別不爲兒女別

悲歌斫地勸芳醪

○全

西村天四

洛陽年少氣高々

結束從軍膽也豪

感狀應歸舉旗手

家風欲試發劔刀

天威已見王斯怒

神略不須師久勞

歌舞入城春若海

與君何日醉醇醪

○全

關半田

長征萬里北辰高

祖道當筵意氣豪

昨夜好投誅賊筆
欽君少壯斯于役
刮目期他凱旋日

○全

曠原烽火接天高
雪窖霽開晨使犬
敵王所憚臣工美
女真碑文存得勝

征露劍舞終

今朝更帶斬邪刀
嗟我老來難服勞
展將感狀酌新醪

內藤湖南

北出邊牆氣勢豪
星河影動夜橫刀
憐爾不辭行伍勞
可無憑弔醉山醪

明治三十七年五月七日印刷
明治三十七年五月十二日發行

不許複製

發行者 石塚猪男藏
印刷者 岡島種

大阪市東區安土町心齋橋東八

石塚書店

電話東二〇二四番

發賣所

